

Kyoto Performing Arts Center Experimental Theater Series vol.21
京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター上演実験シリーズ vol.21

KPACプロデュース公演

ピロクテテス

作・演出: ジョン・ジェスラン

出演: 観世榮夫、久保耐吉、長谷川博己

2005.5.27 fri.7:00pm | 28 sat.3:00pm

京都芸術劇場 春秋座(京都造形芸術大学内)

PHILOKTETES

JOHN JESURUN

「ギリシャ悲劇」という知の毒・葉が、今、21世紀のヴァーチャル空間へと、静かに注ぎ込まれる PHILOKTETES BY JOHN JESURUN

『ピロクテテス』(ソポクレス原作)とは?

ギリシャの弓の名手ピロクテテスは、トロイア遠征の途上、毒蛇に足をかまれ傷が化膿する。その腐臭と痛がる声が疎ましいと、ギリシャ軍によって彼は孤島レムノスに置き去りにされた。見捨てられた怒りと孤独のうちに10年が過ぎた時、ピロクテテスの名弓なしにトロイア陥落はないという予言により、オデュッセウスとネオプトレムスは、再び彼を戦争に呼び戻そうとやってくる——。ジョン・ジェスランの『ピロクテテス』は、以上の物語を踏まえつつ、それを1990年代のNYに置き換えた改作である。

ジョン・ジェスランは、最も来日が待望されてきたニューヨークの前衛的な演劇作家の一人である。彼が演劇におけるキャリアを本格的に開始するのは、1980年代初頭のこと。「ジェスランは彫刻を学んだ後、映画を作りたいという動機から演劇に足を踏み入れた。…彼にとって「演劇」とは、「映画」の製作、いわばフィルムなしで映画を撮影することと同義なのだ」(ハンス=ティース・レーマン著『ポストドラマ演劇』)。「イメージの演劇」の旗手として世界的に活躍し、すでに何度も来日しているロバート・ウィルソンのことはよく知られているが、ジェスランもまた、ウィルソンと同じように美術畑から演劇に進んだ作家の一人だ(しかもジェスランは、演劇作家としてデビューする以前に、テレビのプロデューサー的な仕事まで務めている!)。それにしても、「映画を作りたいという動機から演劇に足を踏み入れる」とは、一体どういうことなのか?

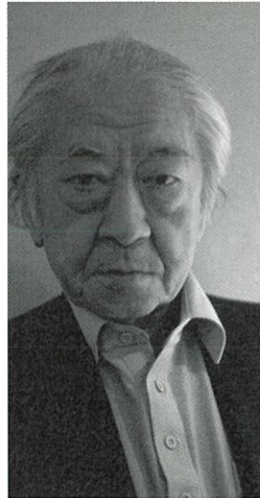
「ジェスランの『SNOW』という作品を観て、「中継」だけでも演劇が成り立つんだ」というきわめて大きな発見があった。以前僕も生中継が間に入る芝居をやったことがあるけど、ジェスランは全編生中継。そんなバカなと思った(笑)。(宮沢章夫)。—このコメントにも現れているように、ジェスランは、生身の俳優を観客のすぐ近くの、けれども観客からは見えない場所で演技させ、その演技をビデオで中継した映像だけを観客が見つけ、といった風変わりな上演空間を設計したり、「録画された映像」と「ライブの映像」と「ライブの身体」を同時に並存させることで、観客の知覚を、メディア空間に特有の〈非在感〉が徐々に浸食していくような実験的な作品を常に提供しつづけてきた。けれども、彼の特徴は、そうしたメディア・ミックス的な実験精神を華麗なスペクタクルへと昇華させることではなく、〈空間〉のなかに流れ出す〈言葉〉や〈身体〉の生理的な感触における様々な位相を前景化することによって、ここにいる身体やここで発せられる言葉の政治的な位置への問いかけを、絶えず研ぎ澄ませてきたことにあるのではないだろうか(「映画」や「演劇」という、一見アナクロなジャンルの名に対するこだわりも、案外そんなところに発しているのかもしれない)。

『ピロクテテス』は1993年、ウースターグループの最も重要な俳優の一人であり、エイズで亡くなった友人ロン・ヴァウターの希望に応えるべく執筆された。ヴァウターの死去のため、彼をタイトルロールに配する予定であった上演は実現せず、2004年12月ベルリンにおいて、ようやく英語版の初演が彼自身の演出により実現した。ギリシャ悲劇を原作としつつも、物語は現代NYのゲイ・コミュニティの状況へと完全に置き換えられ、それによって古典が持つ普遍的な問い(権力、差別…)を、今日的な政治空間のなかに再生しようとする。そしてまた、ギリシャ悲劇という〈亡霊〉を、よりアクチュアルに召喚するために、能役者の言葉と身体との共同作業が、この日本版において、ついに実現したのである。

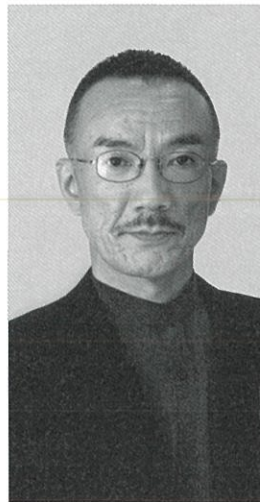
(森山直人/京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター)

ジョン・ジェスラン(1951—)

ミシガン生まれの劇作家、映画作家、実験演劇演出家。フィラデルフィア・カレッジ・オブ・アート(1972年芸術学士)、イェール大学(74年芸術修士)で彫刻を学ぶ。数本映画をプロデュースもしているが(77-9)、CBS(76-9)でメディア・アナリストとして、またディスク・キャヴェット・ショー(80-2)で仕事をしていた間、日常生活へのテレビの影響に注意を引かれる。ジェスランの演劇作品は文化的ステレオタイプや社会の心理的サブテクストを探求する。ライブのアクションと映画的効果を合体させた彼の方法は、舞台上の登場人物のリアリティを脱構築し、宙づりにしてしまう。彼に影響を与えたとされるのは、ヒッチコック、ガートルード・スタイン、ピランデルロ、シュルレアリスム、プレヒト、ウースター・グループ、リチャード・フォアマンなどである。彼の最初の演劇作品『虚ろな月のチャン』(82-)は、マンハッタンのピラミッド・クラブで毎週上演された30分のエピソードからなる連続物で、85年にベッシー賞を受賞し、現在のところ、第58話まで発表されている。その他に、『ホワイト・ウォーター』(86)、『ブルー・ヒート』(91)、『シャターハンド・マッサクル』(92)、『上陸地点』(93)、『スライト・リターン』(94)、『スノウ』(00)など。86年、『ディープ・スリプ』でオービー賞受賞。ドイツを中心とした海外での公演や教授歴も多いが、日本とも縁が深く、99年、東京大学客員教授に続き、02年-03年京都造形芸術大学教授。



観世榮夫 ©Naoko Tamura



久保耐吉



長谷川博己(文学座) ©Hitomi Sato

作・演出:ジョン・ジェスラン
訳:内野儀、川口恵子

映像技術監督:リチャード・コナーズ
映像技術コーディネイト:木村隆志
舞台監督:上田光成(ニクステージワークス)
照明:小笠原純(ファクター)
音響:相川晶(サウンドウィーズ)
衣裳:阿部朱美
通訳:ジョナサン・スコット、中条裕子、猪原イサム
演出助手:矢野靖人
制作助手:鶴留聡子(アムアーツ)
制作協力:アムアーツ
協力:荻原達子、ワンダー・プロ、文学座
技術監督:岩村原太(KPAC)
制作:志賀玲子、森真理子(KPAC)

主催:京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター

2005年5月27日(金) 7:00pm/28日(土) 3:00pm

*開場は開演の30分前。

会場:京都芸術劇場 春秋座(京都造形芸術大学内)

料金:一般=前売3,000円、当日3,500円
学生&ユース(25歳以下)=前売2,500円、当日3,000円
*全自由席 *未就学児童のご入場はお断りします。
*学生&ユース券は学生証が年齢のわかるものをご提示下さい。

前売取扱:

京都芸術劇場チケットセンター

Tel. 075-791-8240(平日10:00am→5:00pm)

電子チケットびあ <http://pia.jp/t/>

Tel. 0570-02-9999(オペレーター対応)

Tel. 0570-02-9966(Pコード360-360)

◎5月28日公演終了後、シンポジウムを開催します。

出席者:ジョン・ジェスラン、鴻英良、内野儀、川村毅
司会:森山直人/会場:NA102

アクセス:

・JR「京都」駅・京阪「三条」駅・阪急「河原町」駅から
→京都市バス5番「岩倉」行き乗車。
「上終町」京都造形芸大前下車(京都駅から約50分)
・市営地下鉄「丸太町」|「北大路」駅から
→京都市バス204循環に乗車。
「上終町」京都造形芸大前」下車(約15分)
・京阪電鉄「出町柳」駅から
→叡山電鉄に乗り換え、「茶山」駅下車、徒歩10分
→タクシーで10分
*駐車場はございません。



問合せ:京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター
〒606-8271 京都市左京区北白川瓜生山2-116
Tel.075-791-9437 Fax.075-791-9438
e-mail:info@k-pac.org <http://www.k-pac.org/>